

下級藩士から幕府の勘定奉行並になった男

万延元年(1860)、徳川幕府は米国と締結した日米修好通商条約の批准書交換のため、幕府代表を米国に派遣。遣米使節は米国の軍艦に乗船したが、これを護衛するために幕府所有の軍艦一隻が太平洋の荒波を超え米国に向かった。

咸臨丸である。幕府がオランダから購入した軍艦で、「軍艦奉行(船将)」は木村摂津守喜毅。「教授方頭取(艦長)」が勝麟太郎(海舟)。「教授方」のうち「測量方兼運用方」(航海長)に小野友五郎。乗船者数100人を超えた咸臨丸は、日本で初めて太平洋横断を成し遂げた。

この航海で笠間藩士の小野友五郎(以下、友五郎と略)(1817-1898)が存在感を見せ付けた。その働きぶりを『笠間市史』は「絶えず六分儀を手に天体観測をしていた。帰国後、船将木村喜毅も『友五郎の測量は、彼邦人にも愧ざる業にして、今度初て其比類なき事を知れり』と絶賛した様を載せる。

幕府も友五郎に14代将軍徳川家茂へ単独謁見するようお達しを出した。『小野友五郎伝』は

「笠間藩の一下級武士が将軍に単独謁見するなど、まさに青天の霹靂」と驚きをもって書いている。

笠間藩はこの事態を受け、謁見の直前に友五郎を昇進させた。「友五郎が艦長である勝海舟をさしおき、将軍に単独謁見の榮譽を受けたという事はあつという間に江戸城中に知れ渡った」と『小野友五郎伝』は記している。

咸臨丸で見せた友五郎の活躍は、故郷・笠間で子ども時代から学んできた「和算」の知識が土台となった。友五郎は笠間藩士、小守七郎兵衛庫七の子として生まれた。長男ではなかったため、天保4年(1833)に同じ藩士の小野柳五郎の養子となる。

小野家の家督を継いだ友五郎は、天保12年(1841)、笠間藩江戸屋敷勤務を命じられた。これが転機となった。和算を教えてくれた同藩士の甲斐駒蔵の師匠は長谷川弘。友五郎は長谷川が江戸で開いていた和算塾に入門したのである。

ここで友五郎は和算を極め、笠間藩の「算術世話役」に就任した。以後、藩内でトントン

小野友五郎

Ono Tomogoro

拍子に出世。嘉永5年(1852)には恩師の甲斐と共に天文学に触れながらも主に測量について書いた『量地図説』上下2巻を出版した。

これが幕府の目に留まった。なんと、幕府の「天文方足立佐内役所」に出仕せよ、というお達しが来たのである。笠間藩の下級武士が暦編集のため、幕府天文方で天体観測業務をする事になったのだ。

嘉永6年(1853)、米国のペリー艦隊が浦賀沖に来航した。そんな中、友五郎は安政元年(1854)、遠洋航海の航法を緯度と経度に求めた『渡海新編』4巻を著し、幕府に献上した。友五郎が長崎海軍伝習所(訓練所)に派遣されるきっかけとなった本である。

同伝習所第一期生は友五郎のほか勝麟太郎、佐々倉桐太郎、鈴藤勇次郎らがいる。いずれも咸臨丸で太平洋を渡る仲間となった。渡航後の文久元年(1861)、友五郎はついに幕臣に登用され、軍艦頭取に就任した。

友五郎は咸臨丸艦長となって小笠原諸島の調査にあたった。父島などの実測をもとにまとめた『小笠原嶋総図』は、日本の領土確認のための貴重な資料となった。

慶応3年(1867)再び米国に渡り、帰国後、幕府「勘定奉行並」に昇進。和算を軸に積み上げた自らの実力で友五郎は、大名並みの地位まで上りつめたのである。(文中敬称略)

主な参考文献

『笠間市史』上巻(平成5年発行)、『かがやく笠間の先人たち』(平成26年、笠間市教育委員会発行)、『小野友五郎伝』(平成24年、小野友五郎を伝えてゆく会発行)、『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯』(昭和60年、藤井哲博著)等。



小野友五郎が愛用した天球儀(笠間稲荷神社所蔵)(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「幕末に魅せた和算の力」